

自然概念と自然保護

坂本 博*

Concept of nature and natural Protection

Hiroshi SAKAMOTO*

第一節 自然という言葉の意味

自然保護について考察し、あるいは論争する場合、なによりも「自然」という言葉の意味をはっきりさせないと、首尾一貫したものが見方が出来ないし、また論争がかみ合わない。

例えば、慣性の法則は自然の第一法則であるが、慣性を保護するなどということは全く意味をなさない。トキやカモシカなどと同じく、さまざまな病原菌もまた自然的存在であるが、これらを保護すべきだという主張はまだ聞いたことがない。

手元にある国語辞典で「自然」という言葉の意味を調べてみた。

- 1) 作為を伴わないもの。天然のままの状態。人工によらないで成り立っているさま。人間の力ではどうすることもできない状態。
- 2) 造化の作用。
- 3) 本性、天性。
- 4) 山川草木その他すべての有形現象。
- 5) 世界全体。精神現象もふくむ。

以上のように、「自然」という言葉の意味は多種多様である。私としては以上の意味を踏まえたうえで、この言葉の意味を次の3つに整理したい。

- A) 天然のまま存在している具体的で個別的な事物や事象。すなわち、自然物。これは上記の4)に相当する。
- B) 自然物相互の間に成り立っている関係、もしくは秩序。これは大体上記の2)と5)に相当する。
- C) 個々の自然物の本性。これは上記の1)と3)に相当する。

自然という言葉の以上のような違いを念頭において、自然保護の問題を考察することにしてしよう。

第二節 自然保護論A1型

ここでは「自然」という言葉を上記A)の「天然のまま存在している具体物で個別的な事物や事象」の意味として理解した場合、このような自然を保護することを

「自然保護論A型」と名付けて、これが一体何を主張することになるか、考えてみよう。

さて、この種の保護論が保護すべき対象としているのは存在する全ての自然物なのか、それともある種の自然物に限られるのか。

通常自然保護論A型においては保護の対象とされているのはある種の自然物に限られている。そこで、これを「自然保護論A1型」と呼ぶことにしたい。他方、極めて稀ではあるが、存在する全ての自然物を保護すべきだと主張しているように受け取れる意見や思想もあるから、こちらの方は「自然保護論A2型」と名付けることにしよう。この節で考察するのは前者である。

自然保護論A1型(以下これを簡単に「A1型」と呼ぶこともある)は保護すべき自然物を取捨選択する。それが法の名のもとで行われたものが「天然記念物」である。

長野県関係で天然記念物に指定されているものは1976年の時点では21件である(「世界大百科事典」, 平凡社, 1976年版, 「天然記念物」の項参照)。そのうち私が直接知っているのは上高地と霧ヶ峰湿原植物群落と仁科神明宮の大スギの三つにすぎない。ただし、神明宮の大スギは枯れはてて、数年前に切り倒された。今は切り株だけが残っている。

天然記念物のうち地域を指定せず、そのもの自体として指定され、しかも「特別天然記念物」として最大級の保護対象となっているものはアマミノクロウサギ、ライチョウ、土佐のオナガドリ、カモシカ、トキ、オオサンショウウオ、コウノトリ、カワウソ、アホウドリ、タンチョウの10種である。

これらの動物のうちカモシカの運命ほど自然保護論A1型の本質を我々に教えてくれるものは他に見当たらない。

かつてニホンカモシカは絶滅寸前の珍獣であった。大町山岳博物館で飼育されていた番のカモシカがバンドの見返りとして中国へ贈られたことを人々はもう忘れていくかも知れない。

* 信州大学教養部 Fac. Lib. Arts, Shinshu Univ.

ところが、特別に保護されたカモシカはやがて勢を盛り返して、今度はヒノキの若い芽を食い荒らす害獣と看なされるようになった。そこで林業関係者からの苦情に対して、国はカモシカを特別天然記念物から外して、特定の区域における保護獣とすることを目下検討中であるそうだが、とりあえず一定数のカモシカの捕獲を認めることにした。捕獲されたカモシカのほとんどは何らかの形で死んでしまうから、最近ではその肉と毛皮を商品として流通させてよいかどうかという問題が論議されている。

A1型は保護の対象を取捨選択するが、「取る(つまり、保護する)」の基準は「珍稀」である。絶滅に瀕しているものはこの基準で保護される。有り余るほど存在している自然物はこの基準によって保護の対象にはならない。イヌやネコがそうである。

有り余るほど存在している自然物のうち、人間にとって害にならないから放置して差し支えないものと、そういう訳にはいかないものと、二種類が区別される。

そこで「捨てる(つまり、ぼく滅する)」の基準としては、

- α) 人間の生命と健康を脅かすもの。例えば、病原菌。
- β) 人間の生計を脅かすもの。例えば、林業で生きる人々にとってはカモシカ。稲作で生計を立てている人々にとってはスズメ。山間部で畑作を生計の手段としている人々にとってはサル。

ところで、このような基準を適用する場合、状況に応じて取捨選択される自然物は変化せざるを得ない。

例えば、カモシカの例が物語るように、絶滅に瀕していた珍奇な動植物が保護の結果繁殖を開始して、数を増して来ると、逆に「捨てる」の基準にかなう場合が生じる。だが、捨て過ぎると、再び保護の必要が生じてくる。

したがって、A1型は人間の利害に関して相対的である。要するに、人間を除けば、絶滅に瀕しない限り、それ自体として保護しなければならない自然物は一つ存在しないわけである。だから、A1型は自然保護論と言うよりも、人間保護論と改名すべきかも知れない。

第三節 自然保護論A2型

ある年の秋のこと、ある新聞の投書欄に児童や生徒をイナゴ取りに連れてゆく学校当局を批判するものが掲載されていた。それは「私はイナゴです。今年も実りの秋の近づくと共に、恐怖におのひいています」という書き出しで、最後はつきのように問いかけていた。「俗に虫けらのようといわれていますが、しかし私たちにいのちはあります。それもたったひとつのいのちです。学校ではいのちの大切さを教えながら、一方では金を得るた

めか、こどもたちを使って大量の昆虫をいとも簡単にさつりくさせる矛盾を、関係者はどのような説明で正当化するのでしょうか。」

10日後にこれに対する反論が掲載された。ひとつは「イナゴもネズミも古来人間の敵であるから、これらを捕まえて、殺すのに何の遠慮もいらぬ。どんどん殺しましょう」という趣旨のものであった。これは前の節で紹介したA1型に相当する意見だろう。

もうひとつは「残念ながら、人間は植物を食べるだけですべての栄養素を賄うわけにはいきません。他の動物の貴い生命を奪うことで人間が生かされています。私たち人間は、無益な殺生は厳に慎まねばならないのはもちろんですが、他の動物の死の上に私たちの生があることを厳粛にうけとめ、感謝の気持ちを忘れてはならないと思っています。」

これは「人間が生きていくためには他の動物の生命を奪うことはやむを得ない」という趣旨である。人間存在を全面的に肯定するという点においては、これもまた基本的にはA1型である。ただし、同じA1型でも「遠慮せずどんどん殺しましょう」と主張するのと「殺すのはやむをえない」と嘆息するのでは心情に関しては雲泥の差がある。

さて、虫けらであろうと、これを殺してはいけないという主張に目を向けるなら、その極限は「いかなる生き物も、これを殺してはならない」という主張になる。私はこれを「自然保護論A2型」と呼ぶことにしよう。と言うのは、ここでも「自然」という言葉の意味は「自然物」だからである。

宮沢賢治の童話には動物たちが互いに食ったり、食われたりするというテーマが圧倒的に多い。「よだかの星」という話では、よだかという小鳥がタカに食い殺されることを恐れ、また自分自身も昆虫を殺して食べなければ生きて行けないことを悲しんで、空の星になるという内容である。

また彼の童話の中でも「注文の多い料理店」はよく知られている。東京からやって来た二人のハンターが山奥で見かけた洒落たレストランで何かおいしい料理にありつけることを期待して入ったが、実はそれは山ネコがハンターたちを料理して食べるための料理店であった。残念なこと山ネコは猟犬にじゃまされて失敗したというのがその筋書きである。

「よだかの星」を読むまでもなく、我々は動物たちにおいては食うか、食われるか、そして食うものはまた食われるものであるということを知っている。生態学者はそれを「食物連鎖」と呼んでいる。宮沢賢治にとっては、それは何とも非しい、やりきれない現実として感じられ

たに違いない。

ところが、不公平にも人間だけがこの食物連鎖から超然としている。そこで彼は食物連鎖の中に人間も組みこむという皮肉なアイデアを「注文の多い料理店」という童話で示し、我々に食われる側の恐怖を伝えようとしたのであろう。「私はイナゴです」という投書の主はおそらく宮沢賢治の愛読者なのであろう。

ところで、全ての生き物が「いかなる生き物もこれを殺してはならない」という命令に従ったと仮定してみよう。ただし、この「生き物」から植物を除外すべきか否か、また除外すべきであるなら、その理由は何か、などの難問がもち上がるが、今は仮定の話をしているから、極端を採って、生き物の中に植物も含めてしまうことにしよう。さて、その結果肉食動物はもとより草食動物も絶滅するだろう。人間も例外ではない。残るのは植物といくらかの昆虫と多少の魚類だけになるだろう。

よだかはタカなどに食われたり、またカブトムシなどをたべることにのみ、よだかでありうる。それがよだかというものの「本性（すなわち、第一節で分類した自然という言葉のCに相当するもの）」にほかならない。他の動物や植物についても同じことが妥当する。

すなわち、このA2型は自然物を保護せんとし、かえってそれらの生存を危うくしてしまうというジレンマに落ち込んでしまう。

もっとも、人間に関するかぎり、その本性は明確ではない。例えば、食物についてみるなら、果たして肉食は人間の本性なのかどうか。また、狩猟というレジャーは人間性にとって不可欠なことかどうか。あるいは、毛皮のコートやワニ皮のハンドバッグがなければ、人は生きていけないかどうか。

自然保護論A2型は極論ではあるが、人間中心主義を疑い、人間に対してその在り方を反省すべく鋭く迫ってくるものとして、我々はこれを無視することができない。

第四節 自然保護論B型

以前ある新聞で大変面白いアンケートの報告を読んだことがある。質問の第一項目は「あなたは自然を保護すべきだと思いますか」であった。当然のことながら、ほとんどの人が「はい」と答えた。

第二の質問に先立って、二枚の写真が示された。一枚は杉の木が整然と伸びている林の写真であり、もう一枚はいろいろな木や草が勝手に生い茂っている雑木林の写真であった。次に「あなたはどちらの林が好きですか」という質問がなされた。当然というべきか、意外というべきか、ほとんどの人が植林を選んだという。

たしかに、植林は整然としているという意味では秩序

がある。つまり、秩序が目に見える。これに対して雑木林は雑然としているから、無秩序であるように思える。

しかしながら、植林は「人工林」であり、雑木林のほうがこそ「自然林」なのである。

人工林の秩序は単純であり、そして素人の目にもはっきりと見える。それは制服を着て行進している軍隊の秩序に例えることができよう。

他方、自然林は一見した限りではカオスである。しかしながら、生態学者の目には、多種多様な動植物がそれぞれの状況に応じて生活している見事な秩序、極めて安定した秩序がはっきりと見えているに違いない。それは、子供もいれば大人もいる。男もいれば女もいる。農民もいれば医者もいるなど、さまざまな人間がさまざまな生き方をしている市民社会に例えることができるであろう。

したがって、秩序としての自然は自然物のように目に見えない。恐らくそれを最もよく「観る」ことができるのは科学者の透徹した理性と芸術家の澄んだ感性であるに違いない。

もし自然というものを秩序として理解しようとするなら、それは次のように定義できるかもしれない。「自然とは多数の、そして多種多様な事物相互の間で成り立っている安定した秩序のことである。」あるいは「自然とは多様な事物のダイナミックな生きた統一である。」

したがって、第一節で分類した自然概念のうちB)に相当する「自然」を保護する立場を「自然保護論B型」と呼ぶことにするなら、それが主張するところは次の点に在る。すなわち「自然保護とは我々人間が自然の秩序を認識し、かつ尊重して、それに従って生きることである。」もちろん、この場合の自然秩序は生命を中心に据えた秩序であり、言い換えるなら、生態系の秩序を意味する。

ところで、動植物などの個々の自然物と上で述べた秩序としての自然との関係をどう考えればよいだろうか。さまざまな事物や生物は秩序の構成要素であるから、当然のことながら、要素が消滅してしまえば、秩序は単なる名前だけになってしまうだろう。だから、実質的に秩序を維持するためにはその構成要素を確保しなければならない。故に、その点に関しては自然物の保護も自然秩序の保護も同じである。ただし、このB型においては自然の秩序の限界内でのみ自然物の破壊が認められることになる。

しかしながら、A2型と同様に、このB型の自然保護もまた極めて困難であるように私には思える。なぜなら、我々人間にはどこか反自然的なところがあって、なかなか自然の秩序には従わないからである。

第五節 自然界における人間の位置づけ

キリスト教においては人間は「神の似姿」である。そして旧約聖書によると、神は自分に似せてアダムとイヴを造ったとき、人間に対して地をほう獣や空を飛ば鳥や水の中を泳ぐ魚たちを支配する権利を与え、そして人間たちが地上に満ち溢れんばかりに繁殖することを期待した。

古代ギリシアの哲学者たちは人間を「理性的動物」と看なして、理性の名の下で人間を動物より一段も二段も高いところに位置づけた。

もちろん、キリスト教徒も哲学者も人間の傲慢を戒めるが、それは神に対するもの、あるいは精々同朋に対するものに限られる。

しかしながら、モンテーニュ（1533～1592）は動物たちに対する人間の傲慢を徹底的に批判した。彼は理性も含めて人間固有の美德とされているものが全て動物にも備っていることを例示して、動物に対する人間の思い上がり戒めた。

すなわち、彼は主張する。「人間はほかの動物よりも上でもなければ下でもない」（「エッセー（三）」、岩波文庫、1982年、45頁）。また、「われわれが自分を他の動物よりもすぐれたものと考え、彼らの境遇や社会から別扱いしようとするのは、本当の理性の働きによるものではなくて、愚かな自尊心と片意地によるものである」（同書、88頁）。

とは言っても、キリスト教徒の間では彼は例外に属する。むしろ聖書に記されている神の人間に対する約束を科学技術によって実現しようとするF. ベーコン（1561—1627）のほうが近代キリスト教の正当となった。

すなわち、「人類は墮罪によって、無垢の状態と被造物に対する支配とを失ったが、しかしこの両者は、この世においても、ある程度まで、前者は宗教と信仰によって、後者は技術と学問によって回復することができるからである」（「ノヴム・オルガヌム 第二巻」、河出書房、「世界の大思想6」、1981年、411頁）。

それから三世紀半の間に農業技術の進歩は大規模の食料生産を確保し、また医学の進歩はガンなど少数のものを除いて、たいていの病気を克服してしまった。そして、現在人類の数は約50億に達し、さらに増加の傾向にある。

ところで、ある時あるテレビ番組で私はたいへんショックな例え話を聞かされたことがある。その番組の中で一人の生態学者は次のように語った。「地球を一個の生物に例えるなら、人類というものはガンである。」

人類による大規模な自然破壊と人口の爆発的な増加を念頭に置いたら、このイメージが正面的を打ち当てていることを誰もが認めないわけにはいかないであろう。言

うならば、私自身も地球を侵しているガン細胞のひとつなのである。そして、どうやらこのイメージが自然界における現在の人類の位置を的確に言い表しているように私には思える。

ガン細胞とは人の体内において然るべく分化しないで、単に意味のない生命として、際限なく分裂し、増殖し続ける非合理的なものである。

これまで私はこの病気で身近な人を何人も失ってしまった。私自身もヘビー・スモーカーとして肺ガンで命を失う可能性が大である。地球を侵している一個のガン細胞である私がガンによって滅ぼされるであろうということは誠にいましい皮肉である。

私は今世紀のうちにガン発生のメカニズムが解明されて、治療法が確立されるであろうという話を耳にしたことがある。そして私は医学者たちの業績に対して心から感謝の気持ちを捧げる日が来ることを期待している。

しかし、その時地球という生物は絶望の悲鳴を挙げるのではあるまいか。

ガンという非合理的なものと格闘することが医学者の使命であるなら、人間というこの非合理的な存在と格闘するのは一体誰の使命であろうか。それは生態学者や環境科学者の使命ではなく、哲学者や心理学者や文学者などに課せられた重要な使命でなければならないであろう。

第六節 人間の非合理性について

人間の本性 (human nature) とは一体どういうものであるか。すでに述べたように、人間を「理性的動物」と定義することによって古来哲学者たちはそれを「理性」と看なして来た。

たしかに、人間が理性を備えていることは間違いない。しかしそれが人間性の全てではないはずである。さもなければ、人間の非合理性の根拠はどこにも見当たらないからである。したがって、我々は人間性というものは複数のnaturesから構成されていると想定しなければならない。

さらにまた、認識においては、科学の進歩が示しているように、長い年月の間人間はなんとか理性を鍛えて、それに従うことを知ったが、しかし現実の行動においては、戦争を始めとする数々の愚行の歴史が物語るように、人間は理性よりも強い力をもっている何か他の本性によって突き動かされてきたように思える。

それを俗に言うなら、「頭では分かっているが、なかなか実行できない」ということである。

例えば、誰もが核戦争の脅威を知りながら、それにもかかわらず多くの人々はそれぞれの政府の核政策を支持している始末である。同じように、誰もが自然保護の重

要性を認識しながら、多くの人々は依然としてミンクのコートやワニ皮のベルトを欲しがったり、森林を切り開いたコースやゲレンデでゴルフやスキーを楽しんでいる有り様である。

人間の非合理的な本性を全面的に解明するためには、我我は人間学の進歩に期待をかけねばならないが、今のところ私にできるのは人間の非合理性の一端を垣間見ることだけである。

人間の非合理性について私にいろいろと教えてくれたのはパスカル(1623-1662)である。彼が書き残した「パンセ」の中で私が当面の問題に関連して思い出すのは「気晴らし」に関する次の一節である。

「私は人間のあらゆる不幸が部屋にこもって何もしないで済ますことができないという、この唯一のことから、やって来るのを発見した」(プランシュヴィック版139番)。そしてパスカルによると、それは我々人間が弱くて、死すべきものである故に、自分自身をまともに見つめることができないこと、そこで自分から目をそらして、他に慰めと気晴らしを求めざるを得ないことが最大の理由だという(同上)。

たしかに、人間ほど忙しく動きまわっている動物は珍しい。アリやミツバチなどの昆虫を別にすると、ほ乳動物で人間ほど活動的なものは他に例を見ない。もし人間が動物として生命を維持できるだけのものを獲得し、あるいは生産するにとどめるなら、(正確なところはわからないが)現在の国民総生産は過剰である。多分その何分の一、あるいは何十分の一で十分間に合うに違いない。

我々が現在所有しているものから生存するために最小限必要なものだけを残すとすれば、捨てるもののほうがはるかに多量であろう。我々が現在やっていることから生存に必要な最小限のことだけを選びだしてみるなら、やるべきことは激減するにちがいない。

人間が生存するために必要な最小限のものだけを所有し、あるいは消費し、そして余分なことは一切やらないとしたら、自然物を破壊することは最小限に押さえることができるはずである。それは現在の破壊の何分の一か、もしくは何十分の一かで済むに違いない。

生存の条件が十分に満たされても、人はどうしてそれに満足できないのであろうか。パスカルに言わせると、その理由の第一に、人間の存在が悲惨であり、また卑小であること、しかも第二に人間はそのことを意識することができること、そして第三に人間はその意識を覆い隠すためにさまざまな気晴らしを必要とすることに在る。

私に言わせると、それは人間にとって退屈ほど耐えがたいものはないからである。そしてその理由としては、人間の心の中には、人間を絶えず後から押しつづけ、何

でもよいから、何かをさせようとする盲目的な(したがって、非合理的な)エネルギーが存在しているからである。そして、これが人間の果てしない欲望の源にほかならない。私はそれを「背後からの力」と名づけて、既にその詳細な分析を試みたことがある(『個人』という名の環境の崩壊について)を参照されたし)。

第七節 自然保護のための二つの勧め

以上の考察から私に見えてきたことは次のとおりである。すなわち、人間という自然物の内部には非合理的な本性が宿っていること、そしてこれが限度をはるかに越えたスケールで自然物を破壊しつづけることによって自然の秩序を破壊せんとしているということである。

そこで、最悪の事態を回避するために私は以下の二つのことを提案したい。

1) 学問の勧め

古代の哲学者たちの意見によるなら、人間は理性的な動物である。そこで、人間は動物として生存するために必要な条件を確保することができたなら、残る余裕を「すること」ではなく、むしろ「観ること」に振り向けるべきである。そして、「することの楽しさ」よりも「観ることの喜び」を知るべきである。

私はギリシア語の「テオーリア(θεωρία)」を念頭に置いて「観ること」という言葉を遣っている。古代ギリシアの哲学者(これには科学者も含まれる)たちは特別の意味をのせてテオーリア(観ること)という言葉を用いた。すなわち、それは自分自身と自分を取り巻く全ての事物を理性の目で観ることであり、またそれは何か世俗の利益のためではなく、観ることが喜びであるが故に観ることに専念するという意味である。彼らにとって最高の生き方は「観照的な生き方」(vita contemplativa)にはかならなかった。

学問はまさにテオーリアである。だから、私はここで学問をすすめ、そして多くの人々が学問の喜びを知るようになることを期待している。

人々は勧められなくともスポーツやゲームや音楽などの楽しさを覚えることができる。それは感覚的なものだからである。しかし、感覚的な楽しさの追求が自然破壊や環境破壊に大きな役割を果たしていることは明らかである。その例としてゴルフとカラオケを挙げれば、十分であろう。

しかし、学問は「観ること」に専念するから、自然や環境を破壊することは先ずありえない。そして、学問の主体である理性が味わう喜び(もしくは、面白さ)は感覚的な楽しさの比ではない。学問は退屈という病気に対して一番効き目がある薬なのである。

2) 宇宙への移民

人間の非合理性もまたその本性であるなら、他方においてはそれを肯定し、それを生かす道のこと考えなければならぬ。人口の増加や個人消費量の増大が自然を破壊しているのは、別の見方をすれば、要するに人類にとって地球が小さ過ぎることになる。したがってこの場合、自然破壊の問題を解決する道は宇宙空間への道しかないであろう。

昨年あるテレビで、ロバート・パワーズの「宇宙大航海時代」にもとづく「宇宙船アガメムノン—22世紀恒星への旅」という番組をみたことがある。そして、さまざまな研究所の技術者によって「スペース・コロニー」が構想されていることを知った。それらの中で「アイランド3」は直径6.4キロメートル、長さ32キロメートルの円筒を2個接続したもので、その土地面積は1,300平方キロメートル、すなわち大阪府の3分の2に相当する広さである。そこで、現在の世界の人口50億人を全てこのようなスペース・コロニーに移住させるとすれば、それに必要なコストは現在の世界のGNPの1パーセントで十分であり、そしてその建造に要する期間は50年から100年の間であるという。そこで、今からその計画に着手すれば、21世紀の後半にはそれが完成することになる。

他方、地球によく似た惑星を探して、そこに人類の一部を移住させる計画もあるという。その目的地はエリダヌス座のイプシロン星である。これは太陽の質量の約80%で、地球に似た惑星が存在する可能性があるとされている。そして、そこへ20万人の人間を運ぶ宇宙船の名がアガメムノンである。これには直径1キロメートル、長さ4キロメートル、すなわち約12平方キロメートルの筒型の居住区域が用意されているという。したがって、一人当たりの占有面積はわずかに6平方メートルに過ぎな

い。そして、この宇宙船が光速の3%で走ることにすれば、10.7光年離れた目的地に到着するのは約300年後のことになるであろう。

スペース・コロニーにせよ、アガメムノン号にせよ、その建造は技術的には十分に可能であり、また全世界の軍事費を全て注ぎこめば、十二分にまかなえるはずである。

問題はそんな狭いところで人間が生活する際に、何か精神障害が発生しないかどうかという点にある。なにしろ「人間のあらゆる不幸は部屋にこもって何もしないで済ますことができないという、この唯一のことからやって来る」というパスカルの発見は真理であり、そして私の見るところでは、人間にとって退屈ほど耐えがたいものはないのである。それは特に「観ること」よりも「すること」のほうが好きな人々に当てはまる。

実際のところ、地球を食い潰すガンの大部分は「すること」のほうが好きな人々から成っている。しかも、スペース・コロニーの住人としても宇宙船アガメムノンの乗員としても「すること」のほうが好きな人ほど不適合なのである。なぜなら、それらにゴルフ場やゲレンデを設備する余裕はないからである。

したがって、地球に留って、その自然を守るにせよ、あるいは地球を食い潰した後、宇宙空間へ逃げるにせよ、必要なことは何よりも先ず「学問（観ること）の喜び」を知ることである。先ほど述べたことを繰り返すなら、退屈という人間固有の病気に最もよく効く薬として学問に勝るものはない。さもなければ、エリダヌス座のイプシロン星やその他の惑星にたどり着く前に人々は退屈という病気で倒れてしまうに違いない。（もっとも、300年間冷凍されたまま運ばれるという手もあるそうだから、心配は無用だとも言われている。）